

A Challenging Job

明日へ 未来へつながる農業⁽³¹⁾

広い農地を確保するのが難しい飯田下伊那地方の農家にとって、地形のハンディキャップをいかに逆手に取るかが、生き残りの鍵になります。少ない土地でも効率よく収入を得るために選択肢の一つが観賞用の草花類いわゆる花きの栽培です。

飯田市立石の玉置勤さん(51)は、2008年からダリア栽培一本に切り替えた園芸農家です。84年、20歳で家業を継いで農業に携わるようになつた当時は、畜産・稻作・野菜・果樹などすべてを手がける複合経営で、リヤトリスなど花の栽培力を入れ始め、トル「ギヨウやブルースター(オキシペタルム)などを栽培。08年には最後まで続けていた柿栽培もやめてダリア一本に絞ることを決断しました。両親が高齢化するなか、収穫や皮むき、乾燥などで手間のかかる柿は「家にどうすれば限界だったのです。そのころ、ブルースターハイブリッドの運作障害が重なったのも大きな理由の一つでした。「まるで波が押し寄せるみたいに枯れ始めて。何か他のものに切り替え

92年以降、水田をビニールハウスに切り替えるようになってから本格的に花きに力を入れ始め、トル「ギヨウやブルースター(オキシペタルム)などを栽培。08年には最後まで続けていた柿栽培もやめてダリア一本に絞ることを決断しました。両親が高齢化するなか、収穫や皮むき、乾燥などで手間のかかる柿は「家にどうすれば限界だったのです。そのころ、ブルースターハイブリッドの運作障害が重なったのも大きな理由の一つでした。「まるで波が押し寄せるみたいに枯れ始めて。何か他のものに切り替え



中山間地域を照らすダリアの光

ダリア農家 玉置勤さん(飯田市立石)

全国に認められた南信州の花き栽培

JAみなみ信州花き部会(部員約570人)は、ダリアを柱にデルフィニウムやリヤトリス、ホオズキなど200種以上の草花・花木を生産しています。中には観賞用のトウガラシや花竹(ハチク)、青リンゴといったユニークなものも。生産量は少なくとも、市場からは「南信州に行けば一年中何かがある」という定評を得ています。

標高差に加え、急傾斜地や日陰地など条件の悪い場所でも適材適所の品目を選ぶことで多品種栽培を可能にしています。生産された花を一つの専用選花場で検査・出荷していることも、高い品質を安定して維持できる理由の一つです。

こうした取り組みが認められ、同部会は2012年度にJA全中とNHKが主催する「第42回日本農業賞」で集団組織の部の大賞を受賞。13年度には明治神宮で開かれた農林水産祭で総理大臣賞を受賞しました。

一方で、ライバル地域との競争は気が抜けません。ダリアのハウス栽培は他の産地でも取り組みを始めています。JAみなみ信州では官学など連携しながらオリジナル品種や新しい栽培技術の研究を進めています。



◆信州フラワーショーに出品された南信州産ダリア(2012年、伊那市)

記事に関する問い合わせ

●飯田市農業振興センター ☎0265・21・3217

ダリアは1株が2~3年もつ多年草で、2~3ヶ月おきに花を収穫できます。品種を変えれば連作障害の心配もぼ

導入してこの世界に参入。慣れない1年目は夏場の暑さで土が蒸れ、球根を腐らせてしまうなどの失敗も経験しました。「初期投資もあったからどうなるかと思つたけれど、JAの技師さんがこまめにアドバイスしてくれて助かりました」と玉置さん。幸いその後は軌道に乗り、コンクリートでも優秀な成績を収めるまでになりました。

玉置さんは気をもみます。現在、玉置さんは12棟のビニールハウスでシベリア、黒蝶、ミッチャンなど数種類を栽培。毎朝夕、余計な花芽を取り除きながら花を収穫し、家族総出で出荷作業に追われます。「日も休む」とのできる仕事です。

玉置さんが「出荷するのがもつたいないと思うこともある」というほど丹精して育てたダリアたちは、今日も大都市圏の結婚式場などへ「お嫁入り」していくのです。



▶摘み取り有待つばかりのダリア、「ミッチャン」。ピンク色の花が愛らしい
▼飯田市立石の棚田の一角に建てられた玉置さんのビニールハウス。どの土地で何を作るか、南信州の農家たちはつねに知恵を絞ってきました



なければ、と焦っていた時にダリアを紹介されたんです」と玉置さんは振り返ります。あでやかに咲くダリアはブルースターにより格段により値が付く高級花でした。

式場で人気のハウス栽培ダリア

J.A.みなみ信州が全国に先駆けてダリアのハウス栽培を始めたのは2005年。球根から育てるのが主流だった当時、挿し芽でダリアを増やす技術を確立できましたが成功の背景でした。露地栽培のダリアは夏から秋にかけての季節に出荷が限定されますが、ハウス栽培なら年間を通じて供給が可能です。需要が高いブライダルシーズンにも対応できることから、新参の南信州産ダリアは市場でぐんぐん伸びています。

玉置さんはハウスに暖房などの設備を導入してこの世界に参入。慣れない1年目は夏場の暑さで土が蒸れ、球根を腐らせてしまうなどの失敗も経験しました。たけれど、JAの技師さんがこまめにアドバイスしてくれて助かりました」と玉置さん。幸いその後は軌道に乗り、コンクリートでも優秀な成績を収めるまでになりました。

玉置さんは氣をもみます。

現在、玉置さんは12棟のビニールハウスでシベリア、黒蝶、ミッチャンなど数種類を栽培。毎朝夕、余計な花芽を取り除きながら花を収穫し、家族総出で出荷作業に追われます。「日も休む」とのできる仕事です。

玉置さんが「出荷するのがもつたいないと思うこともある」というほど丹精して育てたダリアたちは、今日も大都市圏の結婚式場などへ「お嫁入り」していくのです。

▶摘み取り有待つばかりのダリア、「ミッチャン」。ピンク色の花が愛しい
▼飯田市立石の棚田の一角に建てられた玉置さんのビニールハウス。どの土地で何を作るか、南信州の農家たちはつねに知恵を絞ってきました

